

第84回麻布獣医学会 一般演題7

30ヵ月寛解している犬の鼻端部に発生した肥満細胞腫

米地 若菜, 米地 謙介, 岡村 貴世, 山下 圭介, 福井 麻乃

アサヒペットクリニック本院：奈良県

[症例]

症例は14歳、避妊雌のビーグル。3か月前よりペットホテルに預けた際にできた口の横の怪我が良好しないとのことで当院を受診した。初診時身体検査において、左鼻端部皮膚に脱毛し隆起した直径2 cm大腫瘤を確認し、腫瘤のFNAにおいて細胞質内に顆粒を有する独立円形細胞、好酸球を多数認め肥満細胞腫と診断した。症例の一般状態は良好であった。

その後ステージング及びスクリーニングのために血液検査、胸腹部レントゲン検査、腹部エコー検査、周辺リンパ節のFNA、骨髓検査を行いこの全てにおいて顕著な異常を認めなかったため、ステージI a鼻端部肥満細胞腫と診断した。

[経過]

治療法を選択において、オーナーの希望として顔貌の変化ができるだけ起こらない治療法を選択したいという希望があったため、治療法はマージンを取らずに腫瘤を切除する外科切除の後、放射治療を実施、その後腫瘍のグレードをみて化学療法を検討することとした。腫瘤の切除後皮膚フラップを形成し創口を閉鎖したため創口の治癒に2週間を要したが、術後3週間目より放射線治療を他施設へ依頼し実施した。放射線治療は、メガボルテージ放射線治療機によるもので対向2門照射各1.5 Gy、18分割照射、総線量48 Gyによるもので、肥満細胞腫切除部位と下顎リンパ節を含む部位を照射範囲とした。放射線治療後は鼻粘膜、口腔粘膜における皮膚の急性障害

が見られたが抗炎症治療により良好し、切除した腫瘤の病理検査においてグレード3肥満細胞腫と診断されたため、その後ビンブラスチン、CCNU、プレドニゾロンによる化学療法を開始した。症例は順調に経過し、化学療法開始後6か月が経過しても完全寛解を保っていたため、一旦化学療法を終了し検査のみの経過観察とした。しかし化学療法終了後17ヵ月目に、左下顎リンパ節、その後前回腫瘤発生部位とほぼ同じ場所に肥満細胞腫が発生した。この時点でも遠隔転移は認められなかった。全身状態は良好であったため、前回実施した化学療法を再び開始し現在下顎リンパ節においては部分寛解、左鼻端部に関しては完全寛解を保っている。また肥満細胞腫の局所転移が発見された時のチミジンキナーゼ活性は5U/lであり、顕著な変化は見られなかった。

[考察]

本症例は、局所への浸潤が強く挙動が悪いとされるグレード3鼻端部肥満細胞腫であったが、積極的な治療が可能であり、現在も良好に維持できている。

しかしながら化学療法が効果を示さなくなれば、病態の進行は否めず、現在分子標的治療を含め次の治療法を模索中である。

また近年、様々な腫瘍においてマーカーとなりえるチミジンキナーゼ活性においては、本症例において顕著な変化を示さなかった。犬の肥満細胞腫とは関連しない可能性があり、今後さらなる検討を重ねたいと思う。